

C 中学校 ～教員が伴走者の役割を果たしている例～



教員が生徒の「伴走者」としての役割を果たせるよう、職員会議などで共通理解を図り、指導に当たっています。



チームで推進する探究学習

全学年の生徒が縦割りゼミ形式のグループに分かれ、年間を通して一つのテーマで個人探究に取り組んでいます。一人の教員が担当する生徒は11～12名で、教員は生徒の探究の進み具合を見取りながら、共に考えたり助言をしたりする「伴走者」の役割を果たしています。C中学校では、年度初めの職員会議で探究的な学習や校内の取組について共通理解をすることから始めています。そして毎月、探究学習担当者、研究部、各学年の総合担当者（学年主任+1人）で打合せを持ち、職員会議で提案、検討し、チームで探究学習を計画、推進しています。

教育委員会は、2020年度から一般社団法人と連携して「探究学習支援事業」を立ち上げました。総合的な学習の時間には「探究学習コーディネーター」が毎回来校し、各教室を回りながら、活動を支援していました。生徒にとって、探究学習の相談に乗ってくれる心強い存在となっているようです。インタビューやアンケートを実施したい時は、地域の方々や企業との連絡調整も行い、忙しい先生方の強い味方にもなっていました。

授業風景

一人の生徒が、「災害時に水が手に入らなかったときを想定して、どうすれば飲み水が確保できるか」について実験を行っていました。理科教員が伴走しながら、生徒の実験を補助していました。ろ過装置も生徒が考案し、作ったもので、一度目はうまくいかず、今回は修正した装置での再挑戦でした。新しいろ過装置を通した水を煮沸し、COD検査をしたのですが、得られた結果は生徒が予想したものとは異なっていたようでした。この後も生徒の粘り強い探究は続いていきます。

生徒たちの協働の姿

教室や廊下などで生徒同士が互いの探究について相談し合う場面を何度も目にしました。後輩が先輩にアドバイスを求めたり、課題が似通っている何名かで集まってアンケートを作成したりしていました。別々の教室で活動していた生徒たちが、共通の目的のために集まり、自然と話合いの輪ができていました。



生徒が考案したろ過装置